

One purpose

FOR BETTER COMMUNICATION

同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

特集 『国際主義』の帆を揚げて
～グローバル・コミュニケーション学部誕生～

●同志社人訪問

ロビンズインターナショナル代表取締役

多鹿 正男さんに聞く

『ONE PURPOSE』は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。



特集

『国際主義』の帆を揚げて

～グローバル・コミュニケーション学部誕生～

ゼミ探訪 学びの時間	2
文化情報学部 福田智子ゼミ	
同志社の研究は今	9
複合材料研究センター 青山栄一 理工学部教授	
2009年度 大学決算について	11
CAMPUS NEWS	13
同志社創立135周年記念「新島襄と同志社」／同志社創立135周年記念「函館―脱国の地において―」／硬式野球部、関西学生野球優勝／サッカー部が関西学生選手権を制覇／留学生が祇園祭山鉦巡行に参加／オープンキャンパス2010開催／新任教員・退職教員／2010年度 卒業式・学位授与式／2011年度入学式／本学教員執筆図書紹介	
留学生紹介	15
金ヌリさん(日本語・日本文化教育センター)	
INTERVIEW ～同志社人訪問～	19
ロビンズインターナショナル代表取締役 多鹿正男さんに聞く	
MY JOB, MY LIFE ～シリーズ 私と「仕事」～	20
・梶本 晃佑さん(2006年文学部社会学科新聞学専攻卒業) ・上野 知紗さん(2004年商学部卒業)	
MY PURPOSE	23
全日本大学野球選手権に37年ぶり出場～3回戦敗退の悔しさをバネに、目標は神宮でのリベンジ～ 藤井 貴之さん(法学部政治学科4年次生)	
ANNOUNCEMENT	27
	25



表紙の情景 [多々羅キャンパス]

2010年9月1日、「京都厚生年金休暇センター（ウェルサンピア京都）」跡地にオープンした新しい施設。94室もの宿泊(寄宿)施設や多目的ホールなどを備える「フィリップスホール」の他、体育館、テニスコート10面、ゴルフ練習場やグラウンドといった多様な設備から構成されている。教育理念のひとつである「国際主義」の具現化を目指し、外国人研究者や留学生の宿舎を主な機能としつつ、国際会議や課外活動、教職員・在学生・地域住民との交流など幅広い用途に用いられる。

なお、キャンパスの名称は本学在学生・卒業生や教職員に公募し、決定した。

『国際主義』の帆を揚げて

グローバル・コミュニケーション学部誕生

2011年4月、京田辺キャンパスに同志社大学13番目の学部

「グローバル・コミュニケーション学部」が開設される。

グローバル社会に欠かせない高度な英語の実践運用能力を育成する英語コース、

グローバルに展開する中国語圏の共通語を学び、中国に関する知識・教養を身に付ける中国語コース、

そして外国人留学生を対象に、日本への理解を深め、日本語のプロフェッショナルを育てる日本語コースからなり、

その目的はグローバル化するビジネス、文化、教育の場で、卓越したコミュニケーション能力を発揮できる人材の養成だ。

新島襄がワイルド・ローヴァー号で渡米しておよそ150年。

創立以来、同志社が掲げてきた教育理念のひとつ、「国際主義」の進化を担う新学部を展望した。

ワイルド・ローヴァー号の模型。
今出川キャンパス・ハリス理化学館内
Neesima Roomに常設展示されている。

「世界へ通じる対話力」を磨く3つの道程

プロセス

目指すのは 実践的外国語運用能力の育成

中村●言語文化教育研究センターを再編し、京田辺校地と今出川校地にそれぞれ新学部を設置するという2008年3月の大学評議会決定から3年、いよいよ来年4月に、京田辺校地に「グローバルコミュニケーション学部」がスタートします。大きくは、同志社大学の国際主義という校祖新島襄以来の伝統を引き継ぎさらに進化させることをテーマに、卓越した実践的外国語運用能力を持つ人物の育成を目標にしています。設定しているコースは英語、中国語、そして海外からの留学生を対象にした日本語の3コース。現代のグローバル社会の中では、共通の言語の1つとして英語が使われています。また中国語も今や全世界に広がっており、これからの中国の発展性を考えると、中国語もグローバル社会の中で必要な言語です。その意味から、計画ではまず英語と中国語の2コースの設置が決まりました。その後、文部科学省の「国際化拠点整備事業(グローバル30)」の採択に向けて、日本の学生を海外へ送り出すだけでなく、外国の学生を積極的に受け入れることが重要との観点から、留学生のみを対象にした日本語コースを加えることになりました。それぞれのコースの特徴教育に

ついでの考え方などは、来春から各コースを担当されることになる先生方からお話しいただきました。

吉田●英語コースではもちろん語学を中心に学んでいくことが基本ですが、単に言葉の練習だけをしていただけのでは、学部として目指す本来の外国語運用能力を養うことはできません。つまり、英語を自分のものとして使うには、その言葉を使う環境、状況をしっかり認識しないといけないということです。そのために英語圏の社会や文化背景などの教養を身に付け、自分が社会においてどのような役割を果たしていくのかを考えながら語学力を高めていきます。よく質問される他の外国語学部との違いというのは、社会に出てからの自分をイメージしながら多文化状況におけるコミュニケーション能力と教養を身に付けるということだと思えます。

「話す」「聞く」に加えて 「読む」「書く」力が重要

中西●中国語コースへ来る人の大多数は初めて本格的に中国語を学ぶことになると思いますので、そうした学生を想定したカリキュラムを組み立てています。会話力は口にする機会がないと伸びませんので、少しでも会話の場を増やすために少人数

のクラス編成にし、1年次から中国人の教員がほとんど中国語だけで授業を進めるという科目も設けています。英語コースと同様、文化的背景として近代の中国、日本と中国の関係についても講じる教員を揃えました。また、中国語コースでは会話だけでなく、「読む」「書く」力をバランスよく伸ばしていくことを目指しています。特に中国語の場合、話す言葉と書く言葉の違いが大きく、正しく書くには相当な訓練が必要ですので、まずは話すための文章を作ることから始めていきます。

脇田●日本語コースは外国人留学生が日本語を勉強するだけでなく、日本の社会、歴史などを含めて総合的に日本のことを学ぶためのコースです。ただ、日本に来てから日本語を勉強するのではなく、自国である程度日本語を勉強し、入る前に大学の授業が聴けるくらいの日本語能力を身につけていることが基本です。実際、韓国や中国では高校で第1外国語として日本語を勉強している人が多いこともあり、中国、韓国、台湾など漢字圏の学生が多く入学してくるのではないかと考えています。特に韓国では一般入試も実施しますし、釜山やソウルの高校には指定校推薦の枠を設けています。従来、学部で留学してくる場合は、高校を卒業して1、2年、日本か現地



の日本語学校で勉強してから来る形が多かったのですが、高校から直接进入することができるようにするというのも新しい試みです。しかし、漢字圏の学生ばかりになると、価値観が偏ってしまいかねません。門戸は広く開き、例えば公募推薦のような形で、欧米など非漢字圏の国からも通常の入試以外の方法で入学できるようにしたいと考えています。こうした留学生だけを対象にした日本語のコースはほとんどありません。その意味では、同志社大学の1つの大きな特徴になるのではないのでしょうか。

吉田 ● 中西先生が言われた会話と同時に「読む」「書く」能力の向上を図るといいう試みは、「話す」「聞く」「読む」「書く」という4技能育成に相乗効果があります。話す力には、読む力が反映されます。例えば、幼年の帰国子女などの場合、読む力があるかどうかで英語能力の残り具合が違ってきます。読める水準まで到達していた人だと帰国

しても英語運用能力が衰えにくいのですが、読めない場合には忘れてしまうことが多いのです。英語での会話や、特に会議では意見やコメントがひっきりなしに飛び交いますので、ゆっくり含みを持たせて話しているとは聞いてもらえません。論旨をはっきり、そしていかに効果的な表現で短時間で主張するかが鍵となるのです。そのためには多くを読み、聞くことでより効果的な表現を研究し、そして書き、話す練習をすることにによってバランスよく言語が身に付いていきます。

「コミュニケーション能力を鍛える海外留学」

中村 ● 中国語コースがこれから中国語を学ぶことを前提にしているのに対して、英語コースはある程度英語能力の高い人を対象にしています。これはグローバル・コミュニケーション学部の特徴の1つであるStudy Abroad(海外留学)にも関係してきますね。

吉田 ● 英語コースでは入学して1年後にはStudy Abroadに出ます。そのためにも当然、一定以上の英語能力を必要としますが、より重要なのは留学先の大学で必ず最低でも1科目は、地元の学生がとる授業を履修しないと行けないことです。もちろん英語力を高めるために外国語として英語を学びますが、同時に現地の学生と肩を並べてしっかりと一般の科目を勉強しないと行けない。ですからかなりきつい1年にな

ると思います。留学先については基本的に希望を聞きますが、派遣先大学が要求する英語力のレベルなどの条件を考慮して決めていきます。英語コースでは、今のところ5カ国11校の中から、その人が重きを置いて勉強したいと思う科目を設置している大学を薦めます。履修する科目、行きたい地域、英語力の3つの要素で決定するということですね。

中西 ● 中国語コースの場合は、先ほど言いましたように、初めて中国語を学ぶ人が大半ということから、Study Abroadに出るのを英語コースより半年遅らせています。それまでの1年半でどれだけ中国語力を身に付け、引き上げられるかがポイントになってきます。留学先としては、中国で2大名門大学といわれている北京大学と上海にある復旦大学の2大学が対象になります。英語コースの場合は、大都会から少し離れたところで1年間腰を落ち着けてじっくり勉強できる環境を重視されていますが、中国の留学先はどちらも大都市の

大学です。語学力を上げるためには少しでも日本人の少ない地方の大学に行った方がいいという考え方もあるのですが、この2大学には中国のトップレベルの教授陣が揃っており、それを目指して世界中から留学生が集まって来ています。中国語を共通語にして、いろんな国の学生たちとふれあうグローバルな体験ができます。

脇田 ● 日本語コースにはStudy Abroadはないのですが、その代わりに実習やイン

写真左から 中西裕樹 言語文化教育センター助教(中国語コース*)、中村久男 言語文化教育センター教授(学部設置準備室長)、脇田里子 日本語・日本文化教育センター准教授(日本語コース*)、吉田優子 言語文化教育センター准教授(英語コース*)

* 2011年4月着任予定





ターンシップを用意しています。例えば、京都市内はもちろん、東京など他の都市にも2泊3日などで出かけて行き、実体験として日本のいろんな文化、生活に触れてもらうことを考えています。

推進・交渉・運営管理の 担い手として力を発揮

中村●もちろんテクニカルな語学力を身に付けるということは、数値目標を掲げてやっていきますが、大事なものは英語や中国語をどれだけ話せるかだけではなく、人モノの交流の場で人と人、人とモノ、文化と文化をつなげていくための言語運用能力です。それを持った人がコミュニケーショ

ン能力の豊かな人物ということでしょうから、Study Abroadを通した異文化体験によって運用能力を高め、帰国後はさらに高度な語学力、社会に出る際に必要なコミュニケーション能力を高めるためのプログラムを用意しています。そして、実際にその能力を運用できる場を提供するというところで、3コースを横断して設定しているのが、卒業論文に代わる学びの集大成としてのSeminar Projectです。

吉田●これも外国語学部とは異なる点ですが、自分たちでプロジェクトを企画し実行する、社会でプロジェクトを動かしていく模擬体験を在学中にやってもらおうということ。例えば、模擬国際会議などを教員の指導の元に学生が主体となって行う。企画の段階から始まり、テーマの選択、交渉から管理・運営まで、すべてが実践の場になります。

脇田●全学共通教養教育科目にあるプロジェクト科目のコミュニケーションや異文化理解をテーマにしたものというイメージでしょうか。留学生が多いプロジェクト科目のクラスなら、日本語で脚本を書きキャストを決めて、日本で学んだ日本文化、自国との違いなどをテーマに上演する日本語劇のようなものも想定されますね。

中村●最後に、卒業後ということですが、私たちが育成する人物像として描いているのが、「Facilitator」「Negotiator」「Administrator」です。これは職種ではなく、推進、交渉、運営管理、それぞれの役割を

担える人物という意味です。卓越した外国語運用能力を備え、推進、交渉、運営管理の役割を担える人物、そこに必要とされるのがコミュニケーション能力です。

吉田●どの企業、機関でもこういった役割を果たす人は必ずいます。例えば、歴史上の人物でFacilitatorとして重要な役割を果たしたのは坂本龍馬です。薩摩藩と長州藩を共通の目的でまとめ、同盟を結ばせました。龍馬は何よりコミュニケーション能力に優れていました。

中村●校祖・新島が同志社英学校を創設したのも、優れたコミュニケーション能力を持っていたからでしょう。

中西●本学のアンケートによると、今中国語を必要とする業務があるという企業は6割以上にのぼります。日本は今や中国なでは経済が成り立たないという状況になっていますから、望むと望まないに関わらず、就職すると中国に関わることになる企業が多い。また、日本は近年、国策として中国人観光客の誘致を積極的に行っており、地方自治体等でも中国語が使える人材が必要になって来ています。

中村●来春にはグローバルコミュニケーション学部1期生が入学してきます。4年後、彼ら、彼女らがどんなFacilitator、Negotiator、Administratorとして社会に巣立っていくか。優秀な学生を輩出して、その人たちを見れば同志社大学の外国語教育のレベルの高さがわかる、そのような学部になればと思います。



オープン
キャンパス

グローバル・コミュニケーション学部 講演会&座談会開催

オープンキャンパスで賑わう京田辺今出川それぞれのキャンパスで、グローバル・コミュニケーション学部の独自イベントとして講演会と座談会が開催された。

7月25日、同志社大学の卒業生で現在、環境省地球環境局国際調整官を務める島田久仁彦さんを講師に迎え、「国際社会で活躍するためのコツ」国際コミュニケーション



島田久仁彦さん

ションの本当の意味と交渉官という仕事について」と題した講演が行われたのは、京田辺キャンパスの知真館2号館106教室。

高校生とその保護者ら約150人の聴衆を前に、島田さんはまず「グローバル・コミュニケーションとはどういうことなのか」という問いかけから話し始めた。

「外国語を話すこと」という答えは、2、3割の正解」と言う島田さんは、国際交渉の場において、英・フランス語を何不自由なく操り、時折、ドイツ、スペイン、ポルトガル、ロ

シア語の各言語も用い交渉に臨んでいる。にもかかわらず「コミュニケーションは言葉がすべてではない」と言い切る。言葉はツール。大事なのは話に中身があるか、自分の言葉で話しているかどうかなのです」

高校1年、15歳で初めてイギリスに留学するも、「最初の二週間は、周りが何を話しているのかまったく理解できず、それまで自分の英語に対する自信で伸びていた鼻を見事にへし折られた」島田さん。大学では法学部政治学科に入学。国際機関で働くことを視野に、ディベートやパブリックスピーキングの授業で語学力とコミュニケーション能力を磨く一方、国際会議の運営アシスタントをしながら、同時通訳の勉強もした。同志社大学卒業後は、アームストダ

学、ジョンズホプキンス大学で学び、その後、数々の国際機関に勤務する傍ら、ハーバード大学の国際交渉プログラムにも関わった。2005年に環境省に入省後も最年少で主席交渉官を務め、国際会議の議長もこなすなど、様々な国際舞台で活躍する。自身の経験をもとに、国際社会で対話していくた



座談会(今出川)

さい。この学部はそれをしっかりとサポートしてくれるはず」と呼びかけた。

教室ではその後「言語人類学から考えるグローバル・コミュニケーション」と題して模擬講義が行われ、松木啓子教授*が言語人類学の視点から多様性を貫く普遍性について解説。続いて開かれた座談会には、Betina GUDENHARD 准教授*を司会に、島田さんのほか、海外からの留学生や、留学経験を持つ日本人学生が出席し、それぞれの留学体験やこれからグローバル・コミュニケーション学部を目指す高校生に望むことなどを語り合った。

めに必要なこと、交渉の場におけるコミュニケーションのあり方などを語った島田さんは、来場者に「自分にとっての成功の形、夢、目標を具体的に描いてくだ

また8月1日には、今出川キャンパスでも座談会「異文化にふれるーこころが?!日本人同志社大学編」が開かれ、新学部着任予定のネイティブ教員らが自ら経験した異文化体験を語った。

両キャンパスとも、当日は学部紹介や個別相談も催され、多数の高校生と保護者が来場真の国際人を育成する新学部への期待の大きさをうかがわせた。

*現「言語文化教育センター」所属。
2011年4月、グローバル・コミュニケーション学部に着任予定。



座談会(京田辺)



グローバル・コミュニケーション学部開設記念講演会 「グローバルビジネスにおけるリーダーシップ」

日本コカ・コーラ株式会社取締役会長 魚谷 雅彦 さん

同志社大学のOBとして、母校に世界でリーダーシップを発揮できる人材を育成するグローバルコミュニケーション学部が開設されることを、大変うれしく思っています。

みなさんはリーダーと聞いて誰を思い浮かべるでしょうか。ビジネス界のリーダーの一人に、日産自動車のカルロス・ゴーンという方がいます。“コストカッター”であることよりも、彼が日産の業績をV字回復させた大きな要素は、コミュニケーション力やリーダーシップのあり方でした。彼はPRのプロを雇い、会社にとのような問題があるのかを対外的・対内的に語りました。そして、社員全員が問題意識を共有したことが奇跡的な回復を実現したのです。

もう一人、ユニクロの創業者である柳井正さんは、強い志と夢を持って山口県の小さな服飾の店を、海外にも展開する大企業に育てました。先頃、社内公用語を英語にしたことからわかるように、グローバルな視点で

ビジネスを拡大している、創業オーナーとしてきわめて強いリーダーシップを持った人です。

こうした方々の話から読み取れるのは、リーダー

シップは環境やキャリアによって異なるという事です。リーダーシップという言葉

葉の意味を調べると、統率する、導く、あるいは地位、資質、能力などであり

ますが、「権力」とは書いてありません。権力の行使ではなく、組織や人を

動かしていく能力こそが、リーダーシップなのです。現在、各企業は急速に海外へ進出しています。しかも、進出先に根付き、現地の人々と協力してビジネスを行う時代を迎えています。この時代に対応できる人材には、リーダーとしての資質や能力が必要になってきているのです。

グローバルカンパニーであるコカ・コーラは今、204年の国と地域で商品とサービスを展開しています。私がそこに16年間在籍する



間に、本社のCEO(最高経営責任者)は5人も交代し、その全員が国籍が異なります。自身が日本コカ・コーラの社長を務めていた時も、経営チームのメンバー10人のうち、6人は外国人でした。内訳はアイルランド、ベルギー、南アフリカ、オーストラリア、アメリカ、中国。もちろん共通言語は英語です。多様な国籍の人たちと一緒に仕事をすると、たくさんの発見があり、とても面白いですね。

そんな自身の経験から、グローバルリーダーとなるのにまず重要なことは、基礎に明確なロジックがなければ、相手に伝わるコミュニケーションは不可能だということです。日本独特の“あうんの呼吸”は、日本でしか通用しないのです。

次に、自己のアイデンティティを確立すること

とも肝要です。私がアメリカに留学していた1980年代は日本の企業が急成長し、世界から注目されていた時代です。大学ではディスカッションの最後に必ず「日本の企業なら、このケースではどう対応するのか」と問われました。自分が日本のことを知らないという事は、自己のアイデンティティを確立できない、つまり一人の人間として認めてもらうことができない、ということなのです。



拡がる同志社の「国際教育」

■工学研究科・生命医科学研究科 〔博士課程〕「国際科学技術コース」

日本の技術系企業を支えてきた科学技術者の高い倫理観と卓越した研究開発マナー・ジメメントを背景に、最先端の科学技術を学ぶ、留学生を対象にした教育コース。学位を取得するのに必要な単位は、すべて英語で履修することができる。工学研究科と生命医科学研究科に設置され、2010年10月より協定校からの留学生を受け入れてパイロットプログラムとしてスタートし、2011年4月からは広く一般の留学生を受け入れる。「世界最高水準の科学技術」を、日本型研究開発マナー・ジメメント、

日本企業文化とともに学び、国際的な研究開発チームにおいて主導的役割を演じることのできる、全人的魅力と語学能力を兼ね備えた人材を育成する。

■国際教育インスティテュート

文学部・社会学部・法学部・経済学部・商学部・政策学部の文系6学部横断型のコースで、2011年4月に開設。留学生を対象とする「国際教養コース」と、日本人学生を対象とした「国際専修コース」から構成される。「国際教養コース」は、英語で教授される科目のみで学位(国際教養学士)取得が可能。社会・文化・経済・ビジネス・法律・政治・政策・国際協力等の幅広い分野に

■同志社国際学院(DIA)

企業の海外展開や国際的な連携が進展し、あらゆる分野でボーダーレス化が進む今、真のグローバルizmを見据えた革新的な教育機関が、同志社に誕生する。2011年4月開校予定の同志社国際学院(DIA)だ。6年制の初等部(日英バイリンガル小学校)と12年制の国際部(インターナショナルスクール)で構成され、特に初等部は文部科学省認定の教育課程特例校として、6年間を通して授業の約55%を英語で行う。京都府木津川市に完成する地上4階建ての校舎で、初等部の1～6年生と、国際部の小学1年生から高校3年生までが共に学ぶ。世界標準の教育カリキュラムであるIB(国際バカロレア)に準拠し、子どもの創造性や潜在能力を最大限に開花させる個別対応のプログラムを用意。自力で考え、論理的な思考ができる能力と品格を持った国際教養人の育成を目指す。

そしてさらに重要なのは、人の心を動かすことができるかどうかです。アメリカのビジネススクールに通っていた頃、そこで言われている言葉があります。それは「効果的なコミュニケーションを行いたければ、まず自分が情熱的に生きることだ。情熱的に生きていなければ、相手に強い思いは伝わらな

い」というものです。双方向のコミュニケーションで強い思いをいかに伝えるか、その重要性を私はアメリカで学びました。グローバル化は、現在も猛烈な勢いで進行しています。グローバルなコミュニケーション力を持ち、国際社会で活躍できる人材を育成できなければ、日本の将来は明るいとは言えません。その意味で、グローバル・コミュニケーション学部が誕生することは、日本の将来において大きな意味があるのです。

私がこれからの若者に望むのは、海外に行つて色々な経験を積み、志や夢を持つてほしいということ。そして、常に一人称で物事を考える、つまり「私も」ではなく「私は」の思考をすることです。これから様々な場面で「あなたの意見を求められます。どれだけ頭脳明晰で、素晴らしいアイデアを持っているか、私の意見を明確に表現できなければ通用しません。そのためにも、心に通じる、相手の心を動かせるコミュニケーション力

が必要です。個人としてのアイデンティティを持ちつつ、ロジカルで豊かな表現力、そして思いを伝えられるコミュニケーション力のあつた人、すなわち、次世代のリーダーが、このグローバル・コミュニケーション学部から生まれてくることを願っています。(抜粋)

【PROFILE】
1977年同志社大学文学部英文学専攻卒業。1983年にコロンビア大学でMBAを取得し、1994年日本コカコーラ株式会社に入社。2001年には、同社26年ぶりの日本人社長に就任した。2007年より現職。